

(4) 考察

ア. 1回刈と2回刈の合計青草収量を比較すると青刈区100に対して貯蔵区103, また2回刈のみについて比較すると青刈区100に対して貯蔵区106となり, 両者に大きな差が認められなかつたが, これは青刈区1回刈が7月25日~8月3日(10日間)と利用期の中が短かく, 最終刈取8月3日においてもなお充分再生利用のための刈取適期範囲に含まれていたからであると考えられる。このような事から本試験においては両者間における経営的収量の比較をおこなうことはできなかつた。

イ. 青刈区における1回刈は水分含量84.3%で採食率は平均88.7%でやや悪かつたが, 2回刈は水分含量79.3%で採食率は平均92.3%となり, 1回刈よりも向上した。

ウ. 貯蔵区の1回刈分は水分79%に予乾(-5.3%)して貯蔵した。品質調査の結果はあまり良好とはいへなかつたにもかかわらず, 採食率は100%ですぐれていた。また, 2回刈分は水分69.8%に予乾(-9.5%)して貯蔵し, 品質はすぐれていたが, 稈の堅い部分の残食があり利用率は95.3%で逆に低下した。

エ. 青刈区と貯蔵区の利用率は本試験においては貯蔵区の方がややすぐれているが, サイレージ材料の予乾をしなかつたり, サイロ表面の腐敗を考えると必ずしもこの限りではない。

オ. C試験においてはソルゴー若刈の予乾がサイレージの品質によい影響を及ぼすことが明らかであるが, 予乾区bは予乾のために約10日間も要した事から実用性は認められず, 予乾区a程度の予乾が経営に取り入れられるものと考察する。

2. イタリアンライグラスの地域適応性調査

(1) 目的

最近コンモン以外の新品種が多く作出され市販されているので, 生産力と特性を調査する。

(2) 調査方法

供試品種

コンモン(米国), (マンモスA(雪印), 大葉光(雪印), MB(デンマーク)

試験地及面積

東京都密着試験場内 1P=26.4㎡(8坪), 3B制

栽培方法

10a当……厩肥1500kg, 化成1号40kg, 種子1kg, 全面散播

播種月日……42, 9, 26

(3) 調査結果

ア. 越年前の生育調査

42, 12, 1

No.	品 種	発芽 良否	草 丈	1㎡当 本 数	分けつ	裸地率	葉巾	特 性
1	米国産	良	37.2 ^{cm}	317本	13本	20%	9.3 ^{mm}	比較的立性帯黄緑色
2	大葉光	〃	41.7	266	10.7	25	10.4	米国系よりやや葉先がなびく、 帯黄緑色、葉巾が広い
3	A マンモス	〃	44.1	250	13.7	20	10.2	葉先がなびく、黒緑色でつやあ り、葉巾広し
4	M. B	〃	37.5	350	13.7	15	9.4	やや黒緑色、比較的葉巾広い

イ. 収量調査表 (α当)

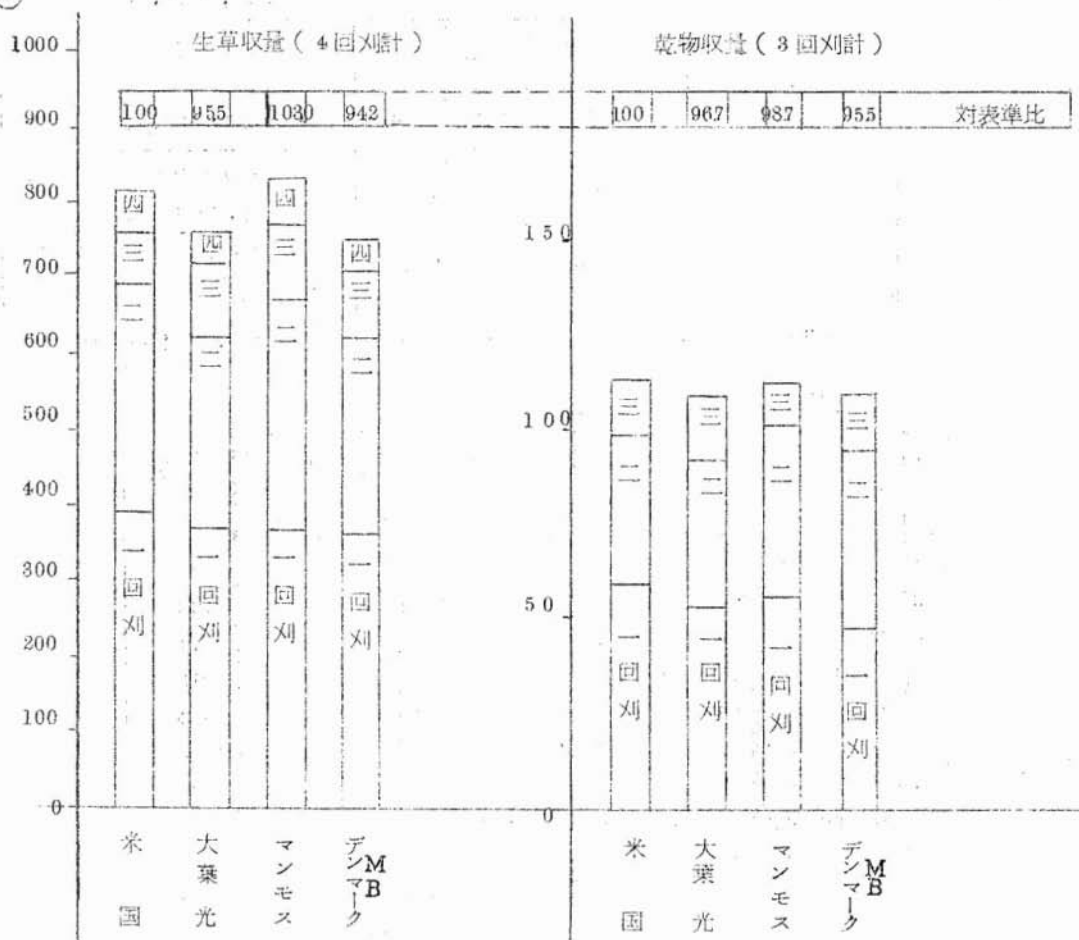
品 種	刈 取 区 数 制	第1回刈取 4月26日			第2回刈取 6月4日			第3回刈取 7月3日			第4回刈取 8月10日			合 計 生 収 草 量
		生草 収量	水分	乾物 収量	生草 収量	水分	乾物 収量	生草 収量	水分	乾物 収量	生草 収量	水分	乾物 収量	
米 国	1	336		511	195		273	50		80	32			613
	2	417		634	356		498	102		163	68			943
	3	411		625	310		434	87		139	66			874
	平均	388	848	590	287	830	402	80	840	127	55			810
大 葉 光	1	312		437	163		267	52		84	57			584
	2	449		629	374		613	187		303	66			1076
	3	378		529	179		294	56		91	48			661
	平均	380	860	532	239	836	391	98	838	159	57			774
マンモス	1	357		500	246		373	84		108	60			747
	2	398		557	318		479	87		112	58			856
	3	369		517	332		508	123		159	74			898
	平均	375	860	525	297	847	454	98	871	126	64			834
デンマーク M.B	1	348		445	280		490	107		188	72			807
	2	312		399	170		223	48		84	43			573
	3	455		557	310		543	115		202	49			909
	平均	365	872	467	253	825	444	90	824	158	55			763

ウ. 各刈取回次における収量比較, 5日毎の草丈調査

(73 Pの図表参照)

(単位kg)

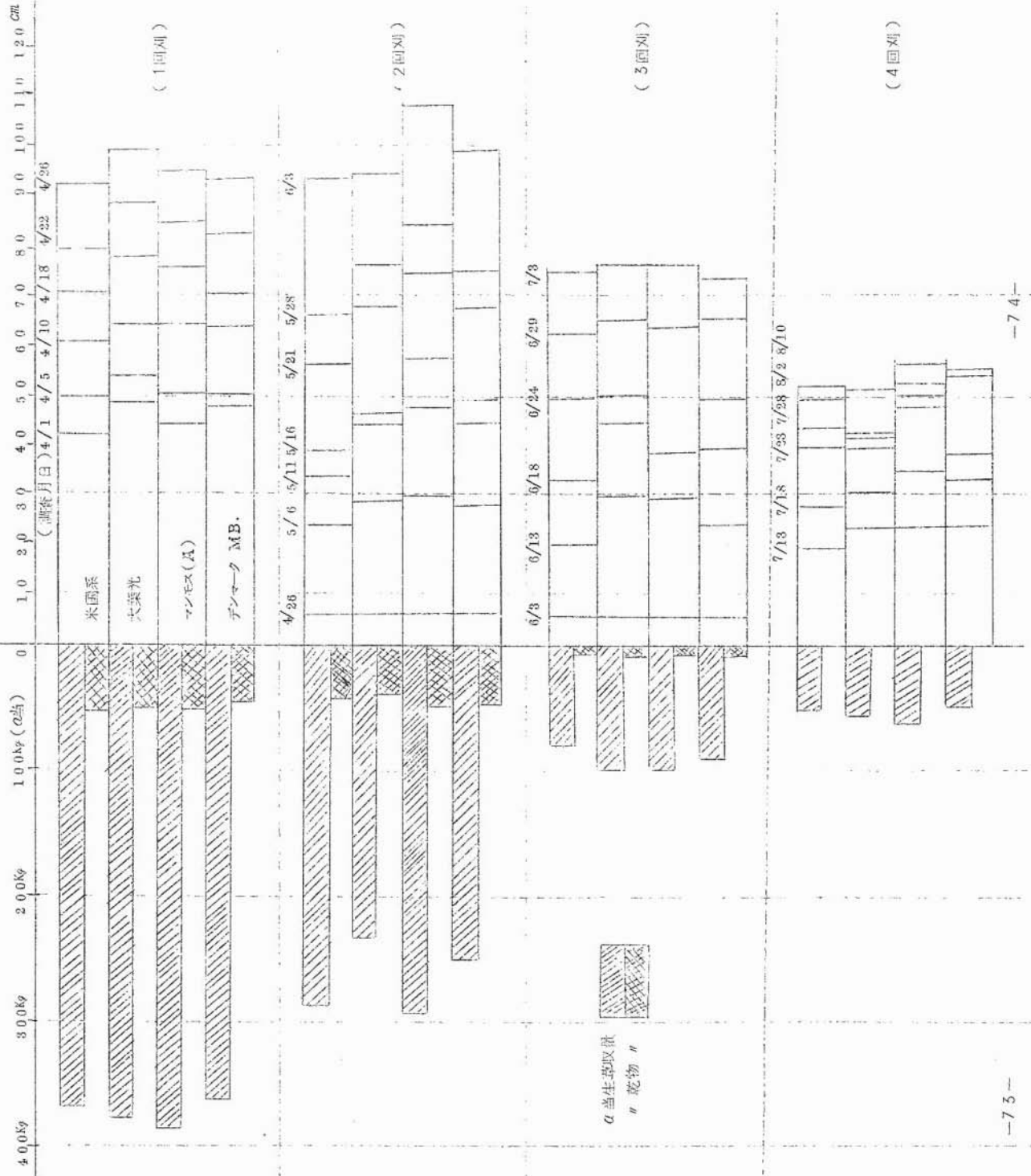
エ. a当累計収量



* 棒グラフ内の数字は刈回数を表す.

オ. 考察

(ア) 本調査において各品種ともに1番草, 2番草の合計収量が全収量に占める割合は80%以上であつて, 6月中旬以降に3番草, 4番草を利用しようとするは圃場の利用効率がきわめて



悪い結果となることが解つた。

(イ) 生草収量はマンモスイタリアン A が標準(米国)比 103%であつたが、乾物収量(3番草まで)においてはいずれも標準区より下廻つた。

(ロ) 新品種が多く出廻つているが飛躍的な増収を期待することはできない。

(ハ) 3番草、4番草の再生状態を観察して大葉光、マンモス A は追肥を充分に施すことによつて、利用期間をのばし、増収も期待できると考えられる。

3. 家畜用ビートの品種別収量調査

(1) 目的

畑作地帯では陸稲の前作として家畜用ビートの栽培例が多いので、品種比較試験を行ない都下畜産農家への指針とする。

(2) 調査方法

供試品種……ハーフシュガーイエロー、パーレス・ストリーネ、シュガーマンゴールド

計3種

試験期間……昭和43年3月21日～8月23日

試験区及び面積……乱塊法3区制 1区10㎡

耕種概要……播種43年3月21日、播種量200g/a

栽植密度、75cm×35cm点

施肥量(a当)、厩肥200kg、化成1号(15, 15, 12)4kg

(3) 経過

3月21日播種、4月1日に発芽し、所要日数は11日であつた。除草は5月13日と6月27日の2回実施した。5月25日に1回間引で1本立とした。5月中旬アオ虫が発生し被害をこうむつたが、収穫期に近いので防除は行なわなかつた。

(4) 成績及び考察

収量調査は地上部の繁茂最盛期の7月7日地上部、地下部の合計収量の最も多い時季と思われる7月27日地上部分のほとんどが枯死した8月23日の3回についておこなつた。

ア、第1回の(7/7)収穫期においてはハーフシュガーイエローがやや劣り、他の2品種は4,300kg/10a程度で大差はなかつた。シュガーマンゴールドのトップに褐色の空洞が見られたほか、病害はなかつた。品質はハーフシュガーイエロー、シュガーマンゴールドともに赤味をおび、肉質やわらかく甘味があつたが、パーレスは皮緑色、肉は白色で固く甘味もすくなく良質とはいえない。